

祈り

■はじめに

9月と11月の2回にわたり、祈りの第一テーマ「誰に対して祈るのか」を学び、「父なる神に祈る」というのが、聖書の教えであるということがわかりました。イエス様は明確に父に祈るように教え、その教えを受けた使徒たちも明確に父なる神に祈っています。

12月からは、祈りの第二テーマ「主イエス・キリストの御名によって」祈るとはについて、学んでいます。

主イエス・キリストは、「わたしの名において」父に求めるように、と言われました。そのため、私たちは、「天の父なる神様」という呼びかけで祈りを始め、「主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン」という結語で祈りを締めくくります。

では、「主イエス・キリストの御名によって」祈る、とはどういうことでしょうか。それが第二のテーマです。

■前回の内容

前回は、ヨハネの福音書と使徒の働きから学びました。そこから学んだことをまとめると、次のようになります。

1. 「主イエス・キリストの御名によって」祈ると、
 - (1) イエスが働いてくださいます。そして、栄光は父なる神に帰せられます。
 - (2) 私たちが祈り求めることを、父なる神はイエスの名によって与えてくださり、私たちが喜びで満たしてくださいます。
 - (3) そのように応答される祈りになるのは、私たちが、単に「主イエス・キリストの名によって」と唱えるのではなく、「イエスを愛し、イエスを神から出て来た者と信じます」という愛と信仰をもって祈るときです。
2. 「主イエス・キリストの御名によって」とは、神がイエスを死者の中からよみがえらせたことを信じることの表明です。

今回は、ヘブル人への手紙から学びます。

■第2のテーマ「主イエス・キリストの御名によって」祈るとは（2回目）

1. ヘブル 2 : 9~10

- (1) イエスは、天使よりも、しばらくの間、低くされた。
- (2) イエスは、死の苦しみのゆえに、栄光と誉れの冠をお受けになった。その死は、神の恵みによって、すべての人のために味わわれたものである。
- (3) 神が多くの子たちを栄光に導くのに、【彼らの救いの創始者】を多くの苦しみを通して全うされたことは、【万物の存在の目的であり、また原因である方として】ふさわしいことであった。
 - ① 【彼らの救いの創始者】とは、イエス
 - ② 【万物の存在の目的であり、また原因である方】とは、神

2. ヘブル 2 : 11~16

- (1) 聖とする方（イエス）も、聖とされる者たち（多くの子たち）も、すべて元は一つ（人としての先祖は同じで、アブラハムの子孫）である。よって、主は彼らを「兄弟たち」と呼ぶ。
- (2) 子たちはみな血と肉を持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになった。
- (3) その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷になっていた人々を解放するため。
- (4) 主は、天使（= 随天使、悪魔と悪霊たち）を助けるのではなく、確かに、アブラハムの子孫を助けてくださる。

3. ヘブル 2 : 17~18

- (1) 主は、すべての点で（ユダヤ人の）兄弟たちと同じようになられた。
- (2) 主が人となられ、ユダヤ人となられた目的は、次の3つ。
 - ① あわれみ深い者となる（人間的な性質において）
 - ② 忠実な者となる（祭司の務めをする上で不可欠の要件）
 - ③ 大祭司となる（イスラエル民族の罪をあがなうため。人でなければ、祭司になれない。← ヘブル 5 : 1）
- (3) 主は、ご自身が試みを受けて苦しまれたので、試みられている者たちを助けることができる。

4. ヘブル 4 : 15~16

- (1) 私たちの大祭司は、罪は犯されなかったが、すべての点で、私たちと同じように試みに会われた。
- (2) よって、私たちの弱さに同情できない方ではない。
- (3) 私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に【恵みの御座】（= 契約の箱の、贖いの蓋）に近づこう。

5. ヘブル 5 : 7~10

- (1) キリストは、人としてこの世におられたとき、自分を死から救うことのできる方に向かって、大きな叫び声と涙をもって祈りと願いをささげ、そしてその敬虔のゆえに聞き入れられた。
- (2) キリストは、御子であられるのに、お受けになった多くの苦しみによって従順を学び、完全な者とされ、彼に従うすべての人々に対して、とこしえの救いを与える者となった。
- (3) 神は、キリストを、メルキゼデクの位に等しい大祭司とされた。
 - ① メルキゼデクの位=王と祭司を兼任する地位 (創 14 : 18)
 - ② モーセの律法では、祭司はレビ族のアロンの家系の男子。
 - ③ ユダ族の家系から出たキリストが大祭司になるということは、モーセの律法が終了したということでもある。

6. ヘブル 7 : 16~26

- (1) キリストは、肉についての戒めである律法 (=モーセの律法) によらないで、朽ちることのない、いのちの力によって、祭司となった。
- (2) キリストは、永遠に存在されるのであって、変わることはない祭司の務めを持っておられる。キリストは、いつも生きていて、とりなしをしておられる。
- (3) したがって、キリストは、ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことができになる。

7. まとめ : 「主イエス・キリストの名によって」祈るとは、大祭司なるイエスを通して神に祈るということです。

- (1) 私たちは試みに弱く、失敗しやすい者ですが、イエスは私たちの弱さをよくわかってくださいます。イエスは私たちのために神の御前でとりなしをしてくださる大祭司です。
- (2) イエスが代わって祈るのは、違います。私たちは、イエスがとりなしてくださるから、大胆に神に近づくことができるのです。

次回は、2月19日、このテーマの第3回目、エペソ人への手紙から学びます。